

公立久米島病院だより

久米島おとな健康プロジェクト 28

— 喫煙の弊害 その⑦ 受動喫煙回避への取り組みと成果 —

病院長 深谷 幸雄

今回は受動喫煙を回避するための様々な取り組みを紹介しましょう。

世界的にはオーストラリアやイギリスの接客産業の企業規範の中に屋内禁煙化推進を掲げることから始まりました。つまりモラルとして自主規制から始まったわけです。しかし効果はなく規範遵守率はオーストラリア・ウェールズ州でわずか2%、イギリスでは1%に至りませんでした。他には2006年のスペインでも自主規制という形を取りましたが、完全禁煙にした業者は10%にすぎなかったようです。自主規制という取り組みは実行を伴わないということがわかったのです。

日本の場合には1992年福岡県北野町で「環境を良くする条例」としてポイ捨て禁止条例が作られました。これは受動喫煙防止と言うよりは町の美化を目的としたものでしたが、刑事罰としたために実行が上がらず、失敗に終わっています。刑事罰の場合は必ず裁判を行わなければならず、かえって法律としての規制がかからなくなってしまうのです。2002年東京

千代田区では「路上禁煙地区」を制定しました。これは路上での受動喫煙を回避することを目的としたもので、行政罰として町の職員が直接違反者から罰金を徴収できるものとしたため実行があるものとなりました。それでは受動喫煙を防止する法律ができるかどうか。アメリカのヘレナという地区では、公共の場での屋内喫煙を時限的に6ヶ月間禁止にしたところ、心筋梗塞の発生が減少しました。次も外国の例ですが、カナダでは公共の場や職場に続いてレストランでの禁煙を実施した段階で、心筋梗塞の発生は17%減少、心臓血管疾患は39%減少、呼吸器疾患は33%減少しました。受動喫煙防止のための法的規制の効果が数字として確かめられてきています。

久米島の未来を考えたとき、今の子供達が健康に成長できる環境を整えていくことが不可欠だと思います。今一度久米島の喫煙環境を考え直してみる時期ではないでしょうか。

休診のお知らせ 5月6日(水)は憲法記念日の振替のため、外来診療は休診となります

子どもと保育園その①

子どもはがんばっている！

小児科医 渡邊 幸

さて、4月から新年度が始まりました。新しく保育園に入園したり、進級したりと、大人も子どももちょっとそわそわワクワクする時期ですね。

特に新しく保育園に入園する子どもにとつて、産まれてからずっと二緒で信頼していた親から急に何時間も離れて過ごすことは、大きな不安や試練となります。最初は泣き続けたり反抗したりするのは当然です。しかし、一度保育士さんとの信頼関係ができてしまえば子どもは順応していきます。慣れてしまえば、楽しいこともたくさんあるし、生活リズムも安定します。また食事や排泄の自立等も保育園の先生と家庭とで行っていくので、特に核家族の多い現代に保育園はとても頼りになる存在となります。

「周囲に合わせよう」という気持ちが自然に働くので毎日がんばります。でもそれは私たちが思っている以上に疲れることなのです。(毎日8時から17時まで会社で新しい課題を与えられている状態、と考えると少し想像できますね。)

しかし、いくら慣れるといっても保育園へ行くことは、居心地のいい「家」から荒波のある「社会」へ出て行くことです。特に年齢が小さい子(0〜3歳)はまだそのような「社会」でやっていく力は備わっていないので、なかなかうまくいかないこともあります。それでも子どもは「大人の期待に応えよう」、

「周りに合わせよう」という気持ちが自然に働くので毎日がんばります。でもそれは私たちが思っている以上に疲れることなのです。(毎日8時から17時まで会社で新しい課題を与えられている状態、と考えると少し想像できますね。)

「上手にできたね」「ほんとだ、飛行機だね」などと認め、気持ちを共有してもらえることが嬉しいのです。こうして親に認めてもらうことで、子どもは明日からまたがんばる力を蓄えて行くのです。親も本当に忙しい日々だと思いますが、この時期の子どもに対しては忍耐強く(なるべくキレず)、温かく(子どもの話や行動に共感して)接してあげて欲しいと思います。